
今を春べと咲くや木の花

千

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今を春べと咲くや木の花

【Nコード】

N0443Z

【作者名】

千

【あらすじ】

《さあさ、皆さんご覧下さい。

五七五七七の歌の音色は、物語の幕開けの調べ。

きつと楽しい一時になるでしょう。》

愛する人を失った忍、双子の姉と肉体をわかつ少女がいます。

瀬をはやみ

瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわねても末にあはむとぞ思う

ふ、と意識が覚醒する。

カーテンの向こう側は闇に包まれていて、日が登っていないことを暗に知らせている。

寝る前に見た月は、指で空に穴を開けたかのような真ん丸だったが、雲に隠れているのか、月はうっすらとその輪郭だけを見せていた。

恐ろしいほどの静寂は、冬の冷たい空気が神聖なものに変え、まるでこの空間だけが時から切り離されているような感覚に陥らせる。

しかし、時は止まっただけではなくれない。

スツ、スツ、……俺の寝ているベッドの向かいにある扉、その奥から、僅かに衣擦れの音が響いてくる。

だんだんと音はこの部屋に近づき、今、目の前でゆっくり、ドアノブが動き、扉が開く。

またか。

俺はそう呆れながら、枕元に置いてあった小型ナイフを無粋な侵入者にむけてはなした。

視界の端で見知らぬ男が崩れ落ちるのをとらえた後、俺は些かやさぐれた気持ちで布団にくるまりなおした。

日の国の城下町、その中でも貧民の住む地域に俺の家はある。別に金は余るほど持っているし、そこらの貴族よりも知名度は高いのだが、一応俺の職業は忍だ。忍は日の国で独特の進化を遂げた、いわば暗殺専門の隠密機関だ。たいてい忍は忠誠を誓った主の影として集団で動くものだが、俺は金さえ手にはいれば満足なので、個人プレーで爆走している。それだけの実力もあると自負しているし、何よりそのほうが達成感が半端ない。

ただ問題があるとすれば、依頼を無事遂行したあと、その依頼人が俺を殺そうと画策することだ。

誰かの依頼で自分が標的になる前に、つてわけだ。

昨日の依頼人が今日のターゲット、なんてことはしよっちゅうだから、まあ一理ある。

一理あるが、

目の前には昨日（いや今日か？）やってきた男が喉に深くナイフをさされ絶命している姿がある。闇にとけやすい藍色の服で身を包み動かなくなったその物体は、一見ごみ袋のようだった。

別に今更死体が怖い、罪悪感がどうのこうの、なんて繊細な心はもちあわせていない。

ただ、掃除が面倒くさい。それだけ。

以前の俺なら、こんなぼろっちい家なんてほっぽって、似たり寄りたりなぼろい家を買ったが、いかんせん、それはできない。というか、したくない。

別にこの家に愛着があるわけではなく……。

脳裏に短い黒髪と、鮮やかな笑顔がちらつく。

俺は、人殺しを職業にしているくせに、平民の女に恋をしている。

しかも、絶世の美女ならともかく、平々凡々な容姿の女に。

いや、寒さで赤くなった鼻とか、嬉しそうに頬を染めたり、とても可愛いと思う。

俺にとっては。

この前、めでたく恋人同士になり、両親にも紹介され、このまま結婚街道まっしぐらのつもりだ。

まさしく薔薇色の人生。

そして、今日も彼女はきつと、マフラーやコートで身を包み、俺に会いに来てくれるだろう。

俺はいつも通りデートの誘いをし、日が暮れる前に彼女を家に送り届ける。

他愛ない話をして、笑いあって、隙を狙ってキス。

過保護な彼女の父には内緒だ。

婚前交渉は許してもらえそうにないのが残念で仕方がない。

まったく、馬鹿馬鹿しいことに、俺は彼女が、恋しくて愛しくて…
…どうにかなってしまうそうだ。

まあ、今、思えば、
実際俺はどうにかなっていたんだろう。

その日は、いつそ憎らしいほどの晴天だった。

城下町だけあって、通りは賑わい、冬だというのに熱気で溢れている。

俺はうるさいのは好きじゃない。

人混みの中で一緒にいるより、静かな場所で二人きりのほうが好ましい。何せ愛しい人を独り占めにできる。

けれども、そんな思いとは裏腹に、テンションはどんどん上がっていく。

つまるところ俺は彼女と一緒にいたただけなのだ。恥ずかし。

時計の針が秒を刻むのさえもどかしく、また、同時に彼女を待つ時間が愛しい。

しかし、ともすれば、鼻歌を歌いだしそうなほど、うなぎ登りだっ

た機嫌は、突如上がった叫び声に、地獄へと叩き落とされた。

「ひつ……だ、誰か！通り魔だ！！女の子が刺されたぞ。」

女の子なんてたくさんいる。それが彼女である可能性は低い。でも胸がざわついて仕方がない。人混みを掻き分けて、騒ぎの中心へ飛び込む。

ああ、

人が死ぬなんて、よくあることで。

実際俺も何人も殺してきた。

けれど彼女が血濡れで倒れているところを見ることになるなんて

考えたこともなかった。

真っ白になる頭。

忍としての習性か、恋する男の本能か。

体だけは、仕事のと き なみに素早く動いた。

もう、まわりの騒ぎ声なんか聞こえない。

首の下に手をいれ、彼女の上半身を抱き上げ、未だに血があふれでる傷口にそっと手をのせる。

血が流れすぎていた。

妙に落ち着いた、頭のなかの冷静な部分が、残酷な結論をくだす。

「っ……痛い、痛いよ。いやだ。死にたくない。」

彼女の目に涙が浮かぶのが、夢のなかの出来事のようにだった。顔は痛みからか、はたまた、恐怖からか、くしゃくしゃに歪められていて。

ああ、何故だろう。

それでもなお、君は愛らしい。

瞳孔が開き、彼女の体から、力が抜けていく。

同時に、俺の中の何かも、冷えきって死んだ。

葬儀は厳かに行われた。

泣き伏す彼女の両親。

それを慰めるまわり。

暗く狭い箱に閉じ込められた、彼女。

俺の頭は霞がかかったように、ぼんやりとしていた。

長閑な午後の穏やかさにいた、甘美で、優しく、暖かな思いが、胸の内を巡り、

次の瞬間、音をたてて吹いた風が、それを霞もろともかき消した。

熱のない心に灯ったのは憎悪の炎。

大切なものを奪われたとき、人は鬼になると言ったのは誰だったか。

まったく、俺とすることが、恋に盲目だなんて。

こういう思考は悲劇の主人公のようで嫌いなはずだったのに。藁にもすがるような気持ちで、俺は次を祈っている。

また、来世で、逢うことを願う。

後日、通り魔に殺された少女の墓の前に、彼女の恋人である年若い男性が、眠るように死んでいるのが発見された。

彼の家にはぐちゃぐちゃになった肉片が散らばり、通り魔の首が天井から釣りさがっていたという。

瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわねても末にあはむとぞ思ふ

（滝の流れが速いため、岩に塞き止められて、2筋にわかれてしまった水が、また1つになって流れるように、私たちも必ず一緒になろう。）

めぐり逢ひて

めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に雲隠れにし夜半の月かな

「よく頑張りましたね。双子の女の子ですよ。」

そう言われて生まれたわたしだけれど、わたしは今一人っ子です。双子のお姉ちゃんは、生まれてすぐに死んでしまいました。

わたしはパパとママと三人で暮らしています。

パパはお仕事で忙しくて、いつもお家にいません。帰ってくるときは、お土産として、お菓子をもらいます。優しいパパです。

ママは綺麗な人です。でも、わたしが悪い子だから、よく怒られます。もっともっと頑張って笑いかけてもらえるようになりたいです。

小学三年生になりました。お父さんとお母さんは相変わらずです。この年になってわかったことは、お父さんとお母さんは仲が悪いことと、その原因が私だということです。

少し前に、お手洗いに起きたとき、お母さんの叫びを聞きました。

「あの子が全部、全部悪いのよ！私の可愛い娘もあの子が殺した！あなたが浮気をするのも、あの子のせい！！」

私は悪魔のような子です。

私が殺したというのに、私は何も覚えていないのです。

お母さんに愛されたいなんて、なんて馬鹿なことを願っていたんでしょう！

嫌われるのはあたりまえなのに。許して、なんていえなのに。

それでも、一度でいいから頭を撫でてほしい。できればぎゅっと抱き締めてほしい。

私はわがままです。

小学四年生になりました。

母と父は離婚して、私は母と二人暮らしをすることになりました。

父には母の他に好きな人がいて、私以外にも子どもがいるそうです。もう会わないでほしい、おまえの父親ではなくなったのだから、と言われました。

悲しい。

でも母のほうが何倍も悲しかったのでしょ。最近ずっと泣いています。

せめて泣き止んでほしくて、食事をつくることにしました。何も言ってくれなかつたけれど、食べてくれました。

母との距離が近くなった気がして嬉しかったです。これからは毎日頑張ろうと思います。

あと少しで五年生という今。学校のみんなに私のことがばれてしまいました。

人殺し、父なし、声を大きくして言う人もいれば、ひそひそと小声で言う人もいて……

私のまわりには誰もいなくなりました。

小学五年生になりました。私はいじめられています。

主犯は一番仲のよかった女の子です。

辛い。

笑って過ごした日々は遠い彼方。でも、遠くなってしまっただけで、なくなつたわけではないよね？

楽しかったあの頃が心の支えです。

心の支え、でした。

バシャリとバケツの中の水がかけられました。濡れ鼠の私が可笑しいのでしょうか。みんな笑っています。

笑っているけれど、それは私が見たかった笑顔ではありません。

そんなふうには笑って欲しくなくて、どこで間違っちゃったのか、なんて思うと悲しくて、

どうして？という問いが口をついてでました。

「大嫌いだもん。」

目の前が真っ暗になりました。

母も友達も私のことが嫌いだといいます。私に生きている価値はあるのでしょうか。私なんかいなかったほうがいいのでしょうか。

次の日、いつも通り一番乗りで教室にいくと、私の机の上に手紙が置いてありました。

白い紙が折り畳みであるだけのそれは、窓からさしこむ光でオレン

ジ色に染まり、神聖な雰囲気を纏っていました。

私の妹へ

私は死んだと思われている、あなたのお姉ちゃんです。こっそり、あなたのことを見守っていました。

本当はお母さんにもあなたにも会いたいけれど、会えないのでお手紙を書きました。

このことはお母さんにも、誰にも言うてはいけません。双子の私たちだけの秘密です。

辛いことも悲しいことも全部我慢して偉かったね。

何があっても私はあなたの見方で、大好きです。

気づけば私は泣いていました。

わからないことだらけだけど、私のことを好きと言ってくれる人がいることが、とても、とても嬉しかったのです。

その日以来、お姉ちゃんから手紙が来ることはありませんでした。

けれど、いつでもあの手紙が私を励ましてくれます。

小学六年生、中学一年生、中学二年生……

泣きそうになるくらい楽しく過ごせました。

お母さんも笑ってくれるようになりました。

ありがとう。お姉ちゃん。
できれば、会ってお礼がしたい。

私が高校生になって半年。

私は夢を見た。

真っ白な空間に私と、私に瓜二つな女子が、向かい合ってたたずんでいる夢。

本能的に彼女が姉だと思った。

やっと、会えた。

姉さんはいろいろと教えてくれた。

生まれたとき、体は死んでしまったけれど、魂は生き残り、私の体に入っていたこと。

二重人格のように心の中で話し合えればいい、なんて思っていたこと。

いじめられている私を見て、相手をぶちのめしてやりたいと考えていたこと。

突然自分の意思で私の体を動かせるようになり、手紙を書いたこと。

そして、今がお別れの時であること。

「さようなら。」

目覚めた私の頬は、久しぶりに、涙で濡れていた。

姉さん、こんなんじゃ足りないよ。

まだ、たくさん話したいことがあったのに……

めぐり逢ひて見しやそれとも分かぬ間に 雲隠れにし夜半の月かな
（見たかどうかわからないほどの一瞬で、雲に隠れてしまった月。
その月のように、あっというまにいなくなってしまうあなた。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0443z/>

今を春べと咲くや木の花

2011年12月11日16時49分発行